

# なつかしい「音の風景」実践

生活史を物語る音と記憶をめぐるメディア・リテラシー

林 田 真心子

## 1. 実践の背景

本稿は、筆者らが2016年4月から8月にかけて、大学の授業内で行ったサウンドスケープをめぐるメディア・リテラシー実践を報告するものである。この実践は、広島経済大学土屋祐子ゼミ、立命館大学北野圭介・北村順生ゼミ、福岡女学院大学の林田真心子ゼミとの共同で行われた<sup>1</sup>。私たちの周りの「なつかしい音」を収集し、それらを地域を越えて交換し共有することを通して、音と私たちの日常生活との関わりについて協働的に考えることを目指したものである。

言うまでもなく私たちの日常生活は様々な音に囲まれている。しかし私たちはそれらをどのように「聴いて」いるだろうか。山岸美穂は『音の風景とは何か サウンドスケープの社会誌』の中で、コミュニケーションとしての「リスニング（聴く）」に言及している（山岸 1999：63-65）。その中で参照しているのは、突然のスキー事故をきっかけに聴覚を失ったハンナ・メーカが、著書 *Listening* の中で、「聴こう（リスニング）」とすることと「聞く（ヒアリング）」ことの違いを述べていることだ（メーカ 1994=1998）。メーカは、「ヒアリング」とは、脳が音声を認知しているにすぎず、個人の意思なくして行われるのに対し、「リスニング」は、「人が地球からなにかメッセージを受けとって、なおかつそれを理解しようと自らの意思で決め、注意をか

たむけて初めて成り立つもの]であり、意識的な行為であるとしている（メーカ 同上：39）。そして、古くは体系的に意味づけられた発語のシンボルがない時代でもコミュニケーションはあり、リスニングは存在したにも関わらず、現在は様相が異なっていることを示唆している。たとえば、かつてコミュニケーションは、「なにかに気がつき、見つめ、待つことで成立した」。それは現代でも同じはずであるが、いまや「リスニング」はコミュニケーション法のひとつ、受け身ではなく、こちらから働きかける行為として教えられている。そして「かつては人にそなわっていた反応が自分からも発せられない、相手からも受けられない。そんな事態になっているのかもしれない」とメーカは危惧しているのである（メーカ 同上：26-27）。

聴くという行為がひとつの習慣になってしまい、わたしたちは聴き方を忘れてしまっているようだ。そう指摘するのは、「サウンドスケープ」<sup>2</sup>という概念を明確化したカナダの作曲家レーモンド・マリー・シェーファーである（シェーファー 1992=2009：5）。「サウンドスケープ (Soudscape)」とは「Sound」と「Scape」を合わせた言葉であり、「音の風景」や「音の環境」と訳される。「個人、あるいは特定の社会がどのように知覚し、理解しているかに強調点の置かれた音の環境。したがって、サウンドスケープはその個人がそうした環境とどのような関係を取り結んでいるかによって規定される」(Turax 1978：126, 訳は鳥越 1997：60)。ここで対象としているのは、特定の感覚に限定されない、音と人びと、社会との包括的な関わりだと考えられる。私たちを取り囲む音の世界が構造化、あるいは制度化されていくなかで、シェーファーは音の環境がどのように変容しているのか調査研究を行うとともに、それらを教育的活動<sup>3</sup>などに展開し「サウンドスケープ・デザイン」と位置付けてきた。それは「できるだけ多くの人々が、自分の周りの音をより深い批判力と注意力をもって聴けるようにすることによって達成される、「内側からのデザイン」だという（シェーファー 1992=2009：5）。シェーファーは、世界のサウンドスケープを改善するための方法は、私たちが「聴き方」を学ぶことであり、最終的には皆が意識的なデザイン決

定をし始めることだと述べている（同上：6）。

そうした活動を、ここではメディア・リテラシーに接続させて考えてみたい。メディア・リテラシーは、メディアの読み書き能力と直訳されるように、メディアの情報を批判的に受け止め、読み解き、そして自らメディアを使って表現する能力のことである。さらに水越伸は、「人間がメディアに媒介された情報を構成されたものとして批判的に受容し、解釈すると同時に、自らの思想や意見、感じていることなどをメディアによって構成的に表現し、コミュニケーションの回路を生み出していくという、複合的な能力」（水越2002：95）と説明している。メディアのある社会をより豊かにしていくためには、やはり、できるだけ多くの人々が、自分の周りのメディアとの関係性に気づき、主体的にむきあっていくことが肝要であろう。そして一人一人が新たなコミュニケーションの回路を生み出していこうとする日常的な実践が、大切な鍵を握っている。

そんな中、私たちの日常的なコミュニケーションは、少なからず、音と関わっている。しかし私たちは、それをどのくらい意識しているだろうか。たとえば、メディアやテクノロジーの発展は、単に私たちに新しい道具や表現手段をもたらすだけでなく、私たちが世界とどのように関わり、物ごとを考えるのか、その思考の仕方や身体的関わりを変容させてきた<sup>4</sup>。「聴く」という行為も例外ではない。19世紀から20世紀初頭にかけて、蓄音機や電話、無線など新しい技術が次々と開発されたことによって、「音」の複製が可能となっていく。その変容は、人々の声や自然音など「音」が発せられる身体（物体）から切り離されていく過程でもあった。当時の人々は、それを神秘的な現象と捉えたり、あるいは不気味に感じたりもしたという<sup>5</sup>。一方で、同時に私たちは、自らの身体の移動を伴わずして遠く離れた「音」を“きく”方法を手に入れた。もはや、ロンドンのビッグベンの鐘の音やナイアガラ の迫力ある滝音、北海道のタンチョウの鳴き声など、実際に行ったことも見たこともなくても知っている。またパソコンという無機質な物体がそこにはいない人の声を発しても、何の違和感もない。きくものと、きかれるものとの関

係は変容し、私たちは今や、複雑な「音の経験」とともにある。それらは私たちの日常とどのような関係があるのだろうか。

このような問題意識をもとに、本実践では、音をめぐるコミュニケーションについて、問い直してみたいと考えた。第一に、私たちの日常の音を収集するということを通して、自覚的に「聴く」という行為を体験し、「音の風景」を意識してみたい。第二に、その身近な音を他者と交換し、共有することを通して、私たちが普段何気なくすごしている「音の風景」を異化し、そうした音を、私たちはどのように理解しているのか、またそれらが私たちの日常とどのように関わっているのかについて協働的に考えること目指したものである。

## 2. 実践の概要

### 2-1 実践の流れ

ここからは、実践内容を紹介していこう。

図1のとおり、今回の共同実践は大きく3つの段階からなる。第1が、「なつかしい「音の風景」実践」である。第2は、音のストーリーを作成する実践。そして第3が合同発表会である。本稿はこのうち第1段階である「なつかしい「音の風景」実践」について、福岡における学生の様子を中心に報告し、考察を加えるものである。なお、「なつかしい「音の風景」実践」は、筆者が先に行った「音とラジオのメディア・リテラシー実践」(林田 2014)を発展させたものであるが、その考案過程においては共同実践者である土屋祐子氏に多くのアドバイスと示唆をいただいた。最終的な実践は共同企画であるといえる。ここに記して感謝をしたい。一方、第2段階は、土屋らによって考案されたワークショップである。そうしたコラボレーション型のメディア実践であることも大きな特徴である。第2段階以降についてはのちにふれることとする。

「なつかしい「音の風景」実践」には、福岡女学院大学林田ゼミ10名、広

## なつかしい「音の風景」実践（林田）

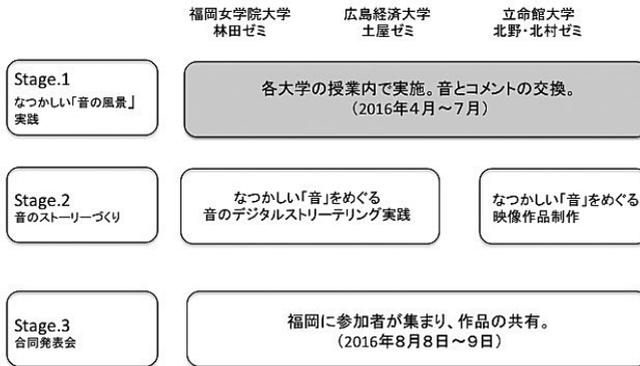


図1 実践の全体像

広島経済大学土屋ゼミ6名、立命館大学北野・北村ゼミ5名の3～4年生計21名が参加した。この実践は、「収集」「共有」「交換」という以下3つのステップのワークショップからなる。

### ステップ1 「なつかしい音」の収集

私たちの日常にある「なつかしい音」をそれぞれがスマートフォン（以下、スマホ）やICレコーダーをつかって収集。その際、「なつかしい」とは何かを特に定義することはせず、各々が「なつかしい」と考える音とした。

### ステップ2 「なつかしい音」の共有

それぞれの地域の授業内で、他者がとった「なつかしい音」をききあった。クイズ形式で聴取し、何の音なのかを想像しあった。その後、録音者より、いつ、どんなとき、どこでとった音なのか、そしてなぜそれを「なつかしい」と感じたのかを報告し、互いに意見交換を行った。

### ステップ3 「なつかしい音」の交換

他地域の「なつかしい音」を交換し合い、ステップ2と同様にそれぞれの地域で聴取した。その際、音の説明を録音者が文章、または音声ファイルにし、

収集した「なつかしい音」にまつわる写真をそえて交換した<sup>6</sup>。

当然ながら、参加者がその場で感じた「音の風景」と、スマホやICレコーダーで録音されたものには違いが生じる。うまく録音できず、中にはがっかりした学生もいたが、そのズレを体験することもサウンドスケープを理解するための学びのひとつであった。なお、ステップごとに参加者にはふりかえりのコメントを記してもらった。以下で引用する参加者のコメントは、それらコメントシートと、第3ステップで交換した音の説明に基づいている。

## 2-2 なつかしさと音

ところで、なぜ対象を「なつかしい音」としたのか。ここで、その理由を説明しておきたい。

まず、「なつかしい」を一般的な辞書でひいてみると、次のように記されている。

- ① 心がひかれて離れがたい。
- ② かつて慣れ親しんだ人や事物を思い出して、昔にもどったようで楽しい。
- ③ 引き寄せたいほどかわいい。いとおしい。
- ④ 衣服などがなじんで着ごちがよい。

（『大辞泉 第二版』）

- ① そばについていたい。親しみがもてる。
- ② 心がひかれるさまである。しっくりとして優しい感じである。
- ③ かわいい。いとしい。
- ④ 思い出されてしたわしい。

（『広辞苑 第六版』）

こうした言語の意味からすると、「なつかしい」とは、個人の経験や感覚

に即した、属人的な感情であるようにもうかがえる。しかし一方で、私たちは昭和30年代を描いた映画『ALWAYS 3丁目の夕日』（2005年公開）を見て、世代を問わずなつかしさを感じることもあるように、まったく経験していないことに対してもそれを感じることもある。なつかしさに対するイメージやモチーフを、どこかで共有しているということは、ノスタルジアを喚起する映画やテレビ、音楽などが多く存在することからも明らかであろう。このように「なつかしさ」はメディアとも深く関わっている。

「なつかしさ」に着目したもう一つの理由は、音が内包する地域性と関係している。「音は、時代と人々の生活史を物語る」<sup>7</sup>（山岸 1999：59）と、山岸がいうように、私たちのまわりには、生活にしみついた音がたくさんある。それらは時代とともに移ろい、時にその地域の特性を色濃く映す。「なつかしい」という感覚に照準することで、できるだけ私たちの生活を映すようなごく日常の何気ない音に参加者が注目することを目指したのだ。そして、それらを福岡と広島、京都の3つの地域で交換することを通して、自分たちの住む地域と、「音の風景」を意識し、その関わりについて再考する契機につなげたいと考えたものである。

### 3. 実践の結果

#### 3-1 収集された「なつかしい音」

では、参加者が集めた「なつかしい音」はどのようなものであったのか。表1は、3つの地域の結果をまとめたものである。なお、音の内容は録音者の説明に即して筆者がまとめたものである。いずれの音源にもさまざまな音の要素が含まれていたため、短く言葉で表現してしまうとその広がりや失ってしまい残念であるが、ここでは、録音者がどんな音を録ろうとしたのか、その意図に照準して記すこととした。

表1 収集された「なつかしい音」とその内容

<p>・福岡 福岡女学院大学林田ゼミ</p> <p>*以下、「」は録音者がつけたタイトルである。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育園の子どもたちが鍵盤ハーモニカで吹いた「ふるさと」の音。</li> <li>・「昼寝と掃除機」(掃除機の音。日曜日の午前、母親のかける掃除機の音を「二度寝しようかな…」と思いながらきいている様子を思い起こして)</li> <li>・「クラスが明るかった時」高校のサッカー部の応援練習</li> <li>・18時を知らせる寺の鐘の音</li> <li>・「3羽のモーニング合唱」。早朝のまだ薄暗い時間に聞こえた、ニワトリとカラスと小鳥の鳴き声。(小学校の頃、運動会の前に緊張して早起きしてしまったことを思い出したため)</li> <li>・キッズケータイの開閉音</li> <li>・ファミリーレストラン「ジョイフル」店内の呼び出し音。発祥である大分には多くの店舗があり、よく行ったため(大分出身)。</li> <li>・幼稚園の「マイク当番」の音</li> <li>・K-Pop(友人と旅行をした思い出)</li> <li>・バス停(高校時代のバス停での思い出)</li> </ul>
<p>・広島 広島経済大学土屋ゼミ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・川のせせらぎ(幼い頃からよく通る川の音)</li> <li>・近所の学校からきこえる音楽(出掛けようとしたときにふと聞こえてきた音)</li> <li>・町のスピーカーから流れる「速き山に日は落ちて」の音楽。</li> <li>・球場に流れる場内アナウンスの声</li> <li>・朝のニュース番組の音(忙しく登校準備をしているときのBGMだった。ある特定の音楽が流れると、遅刻する時間だという知らせにもなっていた。)</li> <li>・カエルの合唱(かつて祖父母の家に行くときよくカエルの鳴き声がきこえたため。)</li> </ul>
<p>・京都 立命館大学北野・北村ゼミ</p> <p>(1人が複数の音を録音している。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雨音(「部活動と雨」)</li> <li>・駅の入り口付近の音。視覚障害者誘導用チャイムの音が記録されている(「都会の駅と城巡り」)</li> <li>・「古い換気扇と夕方の光景」</li> <li>・インスタントカメラの「ネジ巻き音」</li> <li>・「踏切」の音</li> <li>・自転車で来る「豆腐屋さんの音」</li> <li>・立命館大学衣笠キャンパス内の音。視覚障害者誘導用チャイムが録音されている。(「駅に響く音」。なつかしさを感じたのは、この音が地元の駅で耳にした音と同じであったため。)</li> <li>・下宿の近くを流れる紙屋川のせせらぎ(「川のせせらぎ」)</li> <li>・「テレビの中の三味線」(三味線は代表的な音色を持つが、実際の演奏をきいた経験はそう多くない。しかしこの音になつかしさを感じたのは、実家で同居していた祖父母の影響があるからだという。)</li> <li>・「ホーホーホッホッ」という「キジバトの鳴き声」(祖母の暮らす仙台で夏休みをすごしていた頃毎朝きいていた。)</li> <li>・「メトロノーム」(吹奏楽部出身)</li> <li>・「踏切の音」</li> <li>・「Door」大学構内の部室棟の非常階段のドアの音(高校時代の塾のドアを連想した)</li> <li>・「Walk」大学に入って初めて履いた厚底靴の足音</li> <li>・「Bell」下宿先のインターホンの音</li> </ul>

### 3-2 「なつかしい」を喚起する音の風景

表1を概観するとわかるように、学生が収集した「なつかしい音」の多くは幼稚園や小中学校、高校時代など、それぞれの個人的な過去の思い出や記憶にまつわる音がほとんどであった。「かつて慣れ親しんだ人や事物を思い出して、昔にもどったようで楽しい」（『大辞泉』）、「思い出されてたわしい」（『広辞苑』）というなつかしきさであろう。参加者はみな同世代であるため、聴取した際には各々の経験が容易に重なり合い、その時代のなつかしい話で大いに場は盛りあがった。

加えてみられた特徴の中でも、本稿は特に次の3つに注目した。1つ目が自然音。川のせせらぎや、鳥の声などである。2つ目が、テクノロジーに関するもの。ケータイ。インスタントカメラの音などである。3つ目が、「なつかしきさ」を象徴する「音の風景」である。そうした音が少な



図2 「川のせせらぎ」(京都)にまつわる写真<sup>8</sup>

からず収集されていた。その内容と背景を順にみていこう。

まず、自然音についてである。表1をみるとわかるように、「川のせせらぎ」（広島・京都）や梅雨の時期の「カエルの合唱」（広島）など、自然音は多くの人が「なつかしい音」の対象として収集したカテゴリーである。それらは、録音者本人は、ごく個人の経験に基づいた「なつかしきさ」から収集しているにもかかわらず、聴取した際にはみながそのなつかしきさに共感し、それぞれのなつかしい川やカエルの思い出を話す姿がみられたのも特徴的であった。例えば、京都の「川のせせらぎ」（紙屋川）の録音者は、かつては、地元の近くの川でザリガニ釣りや水遊びなどをしたが、小学校も高学年の頃になると川で遊ぶことはめったになくなってしまった。そうしたかつての記憶を思い出させてくれたものとしてなつかしかったと分析する。特に録音し

た学生は、できるだけ川面に近づいて、せせらぎを録音したという。それについて、「ここしばらくの間、私が川のせせらぎを聞く機会がなかったことが理由ではないかと分析する。この音が、雨が降った後に聞こえてくる増水したが故の勢いある川音ではなく、川面の近くによってみなくては聞こえないせせらぎである点は重要である」<sup>9</sup>説明している。つまり、彼が表現しなかったのは、ただの川の音ではなく、その距離でこそきくことができる彼自身の経験に基づく「音の風景」であり、川のせせらぎだったのである。しかし、幼いころ川と親しんだことなど、川にまつわる思い出は、少なからぬ人々が有している共有度の高い経験ともいえるだろう。よって期せずして、その音色は一般化して解釈され多くの人の「なつかしい」という記憶を自然と呼び起こしたのである。梅雨に大合唱を始める「カエルの声」（広島）も、季節や心情を物語る「雨音」（京都）も同様であった。

言うまでもなく、自然は季節という流れの中で日々移ろい、私たちの日常に繰り返し時を刻んでいる。それは各々の思い出と常に同期して、ふと立ち止まると過去を思い起こさせる。私たちの生活史と切っても切り離すことはできない存在である。「川の音のような自然から生まれる音は、誰が聞いてもなつかしさを感じる共通の感覚ではないかなと思った」と学生のひとりがコメントしていることから読み取れるように、「自然音」はなつかしさと結びつきやすいのかもしれない。

一方で、テクノロジーに関する「音」もみうけられた。「キッズケータイの開閉音」（福岡）の例では、図3（左）の折りたたみ式の携帯電話を開いたときの「パカッ」という音と、ともに鳴る「タラントラン」という音楽。そして、閉じるときの同様の音が記録されていた。録った学生は、掃除をしているときにキッズケータイを偶然発見し、久しぶりに充電して開いたところ、その音に触発され小学生のころの記憶が蘇りなつかしいと感じたと説明する<sup>10</sup>。また、現在のスマホではきくことができない音、つまり彼女の現在の日常生活では失われた音であることもポイントであったという。この「なつかしい」に対しても、福岡では大いに共感と呼び、話が盛りあがった。あ



図3 「キッズケータイの開閉音」（福岡・左）と「インスタントカメラのネジ巻き音」（京都・右）にまつわる写真

る学生は、「私も同じものを持っていたので、すごく共感できた」とコメントしている。参加者は、みな同じ頃に同じような携帯を持っており、特に、多くにとっては初めての“自分の携帯電話”だったらしい。その印象も、「なつかしい」を喚起する要素として大きかったようだ。

京都の学生のひとは、「インスタントカメラの「ネジ巻き音」」を収集していた。「ジージーツ」という、フィルムを送るネジを指で巻く音である。録音した学生は、こうしたカメラを小・中学校の修学旅行や何かの記念日などに使用していたという。そしてちょうどこの頃、「写ルンです」で撮影する機会があり、このネジ巻き音をきいて「なつかしさ」を感じたという。この音をきいた福岡の学生の中には、インスタントカメラをあまり使ったことがないが、「なつかしい」と感じた人もいた。そして、いつ、どんなときに、あえてインスタントカメラを使うのかという話で広がった。たとえばある学生は、「なかなか会えない仲間と、次にも連絡をとりたとき」にインスタントカメラをあえて使うという。なぜなら、スマホなどデジタルならば、送信して終わりであるが、インスタントカメラは現像して「渡す」機会が得られるからだそうである。

日々、メディアとともに暮らしている私たち、特に今回の参加者である20歳代前半の彼らにとって、メディア技術変容は生活史を刻む重要な要素なのであろう。そして、その音は明確な「なつかしさ」として描かれる対象であっ

たのは興味深かった。

### 3-3 「なつかしい」を象徴する音の風景

ところで、「自転車で来る「豆腐屋さんの音」(京都)、「18時を知らせる寺の鐘の音」(福岡)、「夕方の風景」(京都)、「遠き山に日は落ちて」(広島)。こうした音は、多くの人が自ずとその風景を想像し思い描くことができる、なつかしさを象徴するような風景といえるのではないだろうか。このような、きいた人が「経験したことはないが、懐かしさを感じる」(参加者コメントより)音を収集した例がそれぞれの地域でみられた。

もちろん、録音した学生はごく個人の経験にもとづいて、なつかしさを感じている。たとえば「豆腐屋さんの音」を録音した京都の学生は、もともと宮崎出身であり、本人曰く、周り一面田んぼで育ち、そこには毎週決まった時間に自転車で「豆腐屋さん」が来ていたという。そして、仕事で忙しい母親に変わってその豆腐を買うのが、彼の担当だったのである。現在住んでいる京都にも、「豆腐屋さん」がくるそうであるが、その「プー、プー」という音は、宮崎のときとは違ってキレがいいそうだ。しかし彼にとってはなつかしい音であり、この音をきくたびに豆腐が食べたくなるそうである<sup>9</sup>。立命館大学のゼミ内でこの音の共有をした時のことについて、彼は「私自身は経験したことからの懐かしさであるが、他のゼミ生は経験したことはないが、懐かしさを感じると述べていた。」<sup>12</sup>と記している。

一方、「18時を知らせる寺の鐘の音」を収集した福岡の学生は、小学生の頃、このお寺の鐘をつきにいった思い出や、18時になる音をきいて「帰らなきゃ」と思ったことなど実体験に基づく心情などを、なつかしさとしてあげている。しかし、きいた人にとっては、やはり経験はなくとも、多くの共感が自然と得られる「音の風景」であった。

このような状況について、福岡の学生1人は、「なつかしさ」には「過去の習慣」に関するものと「なつかしい」という固定概念があるもの」の2つがあると分析する<sup>13</sup>。すなわちそれは、「なつかしさ」にはどこか画一的な

観念が含まれていることとともに、音声的なステレオタイプが存在していることを指摘しているといえるのではないだろうか。

## 4. 考察

### 4-1 学生の気づきから

こうした学生の気づきはどのように考えることができるだろうか。学生が見出した「なつかしい」という固定概念」をもとに考えてみよう。

コメントをした学生は、「いろんな人のなつかしい音をきいて、私にとっては馴染みはなく、実際にきいていたことがある訳ではない音でも、なぜかなつかしいと思ってしまうものが多くあった。」と、さらに説明している。一方、別の学生は「みんなが共感できるなつかしさと、その人にしかわからないなつかしさがあるなと思った」と記している。そうした違いについて、ここでは社会学者フレッド・デーヴィスの記述を参考としたい。デーヴィスは著書『ノスタルジアの社会学』の中で「集合的ノスタルジア」の存在を指摘している。ノスタルジアの源泉には、私的な性格をもつものだけでなく、集合的性格をもつものがあるという。そもそもノスタルジアは「われわれの人生や時代のなかに交互に現れる連続と非連続によって形作られる」ものであり（デーヴィス 1979=1990：73-74）、たとえば、幼年期から思春期へ、独身から結婚へとといった人生の移行期など、アイデンティティの変化と順応を要求されるときに、ノスタルジックな反応がみられるという。同様に、不運な歴史的イベントや突然の社会変化も、似た脅威になり得るものであり、その際、集合体としての人びとに同じような反応を引き起こすことがあるというのだ（デーヴィス 同上：146）。ここで特筆したいのが、デーヴィスが、そうした「集合的ノスタルジア」の大勢が、現代のノスタルジア（1979年当時）においては、メディア産業へと向かっていることを指摘していることである。ノスタルジアはもはやビッグビジネスになっており、多種多様のノスタルジア「製品」を製作する映画、テレビなどが存在する。たとえば、ディズニー

ランドもそうした「ノスタルジア産業」のひとつと考えられる。私たちはそこで、子供の頃、ディズニー・アニメで出会った登場人物と「再会」するのであり、「20世紀の初めの頃のアメリカのスマール・タウンの古き良き雰囲気」に感傷的に引き戻されてしまう。そこは、「巨大な記憶の展示場」なのである（デーヴィス 同上：172-174）。私的なノスタルジアの源泉が個人の生活史に見出されるのに対し、「集合的ノスタルジア」には多くの人びとに広く共有される集合的シンボルが関わっている。そして、デーヴィスは、以前は主として政治的または市民的性格をもつ出来事などに占められていた「集合的ノスタルジア」の風景が、メディアの創造物の増加により変容していること。そしてたとえば「夕焼け」や「誕生日」などノスタルジックな記憶のなかでも私的で親しみを感じると考えられていたことでさえ、広く人びとに共通の、ありふれた変質しやすいものとなってきたと指摘している（デーヴィス 同上：179-181）。

もちろん、本実践が今回対象とした「なつかしい」を、そのまま「ノスタルジア」とイコールで考えることができないことは承知している。しかし、「なつかしさ」を和英辞典でひくと *nostalgia* が選択肢のひとつとしてでてくるように<sup>14</sup>、重なりあう部分があるものとして参考とすることはできるだろう。また、学生が「なつかしい」という固定概念」として指摘した感覚は、デーヴィスのいう「ノスタルジア」に近い情操を指していると思われる。ある学生は、全ての実践を終えた最後のコメントシートの中で、次のようなことを記していた。「なつかしさは何らかの経験と結びついているのかなと思いました。テレビで見たことでなつかしいと思うのも、テレビを見た経験があるし、全く経験していないことは、なつかしく思えないだろうなと思います」。この学生は、「なつかしさ」において、テレビで見たこともひとつの「経験」として位置付け、それも含めた「何らかの経験」が「なつかしさ」と結びついていると表現している。そこからは、「なつかしさ」を呼び起こす経験がメディアとも関わっていること、すなわち、私たちの「音の経験」がメディアが伝えるイメージと深く関係していることに気づいていった様子

がうかがえる。「ノスタルジア」、あるいは「なつかしさ」の源泉は、デーヴィスが指摘するように非常に複合的なものであり、私的な記憶と公共的な記憶は織物のように重なり合いながら、私たちの「なつかしさ」は喚起されている。それについて実践の参加者たちは、彼らなりの発見をしたのではないだろうか。

#### 4-2 実践から得られる知見

ところで、参加者の感想やコメントからは、音をめぐるメディアと私たちの関係性を理解するための示唆を見いだすことができる。そのひとつが、メディア技術と「なつかしさ」の関わりであった。

3章で触れたように、学生たちは自らの生活史に、テクノロジーの革新や変容に関わる音を見出していた。確かに私たちは、ダイヤル式電話（いわゆる黒電話）の「リーンリーン」というベルの音や、レコード針の「バチバチッ」という音に、どこかなつかしさを感じることもあるだろう。もちろんその感じ方の源泉は、世代や文化に応じて異なるかもしれないが、いずれにしても、日々慣れ親しんだメディアが発する音は、時代やその風景をときに物語る。そんな中、今や私たちは、身近なメディアから発せられるありとあらゆる音を日常の中で絶えずきいている。そしてその変化はめまぐるしい。それらは私たちの生活史をどのように綴っているのだろうか。

実践を通して気付かされたのは、メディアの物質性、あるいはそれがもたらす心性と、発せられる音との関わりであった。たとえば「キッズケータイの音」を福岡で共有したとき、学生たちは、「開けた時」と「閉じた時」にかならず発するその「タラントラン」という音を、何度も何度も開けたり閉じたりしてきいたというモノとの関わりを思い起こしていた。その様子は、“最初のケータイ”であったキッズケータイのことをいとおしそうに思い返しているようにもみうけられた。

近年は、パソコンやスマホ、アプリケーションの電子効果音の中に、擬人的な声や動物の声、木琴やピアノなどアコースティックな音を再現したもの

も少なからずきかれる。それらは私たちにどんな心性をもたらしているのだろうか。たとえ電子的に再現されたものとわかっていても、そうした有機的な音を発するほうが、日常の道具としての親しみがわくのであろうか。あるいは、毎日繰り返しきく音は、そのほうが心地よいのだろうか。なぜ、私たちは、そうした音をカスタマイズしようとするのか、あるいはしないのだろうか。こうしたエピソードからは、スマホやパソコンなど、私たちのごく日常的な、身近なメディアと私たちの関係性が、発せられる「音」、あるいは音が発せられない状態であることも含めた、音のあり様とともに結ばれていると感じさせる。それゆえ、メディアを単なる用の道具として捉えるのではなく、そのモノと私たちの関わりを、音も含めたコミュニケーションの様態として、今後より深く探究していく意義はあるのではないだろうか。また、メディアが発する多種多様な音があふれていることは、現代のサウンドスケープの成り立ちとも深く関係していることだろう。

#### 4-3 今後に向けて

3章で紹介した、京都・紙屋川の「川のせせらぎ」を収集した学生は、思い起こされた「なつかしい」を表現するために「川面に可能な限り近づいて録った」という。記録された音は、河岸にじっとしゃがんで、録音機をもった手を水面にかざしていたのだろうか、その光景が眼に浮かぶような穏やかな川の流音で、水が岩にはねかえるような細やかな流れの変化まできこえてくる。川音をとる場所を意識した学生の行動からは、私たちの「音の風景」が、どこからきくのか、どのようにきくのかによって大きく異なること。つまり、わたしたちがその場とどのような関係を取り結んでいるのかによって「音の風景」が違うことを、自然と理解していたことがうかがえる。また、別の京都の学生が収集した音の中には、駅などの入り口できかれる、視覚障害者を誘導するための音チャイムがあった。聴取会では、私たちの日常の中には、そうした音のサインが多くあることを思い起こし、考えていく議論となった。そうした過程は、本実践が目指した目的のひとつである、それぞれ

のサウンドスケープを意識するというプロセスだったと言えるだろう。「日常の音なんて、自分の中でもあまり気にならなかった音たちだったけど、一緒に聞いてみて、なつかしく感じた。」「音を聞くと、なにを表しているのか、どのような状況だったのかがわかるのも面白かったです。音にかこまれて生活しているということを改めて感じました。」「音を聞いただけでみんなが共感しあえるってすごいことだなと思いました」。こうしたコメントからもよみとれるように、本実践の経験は、それぞれを取り囲む「音の環境」に対して、参加者が自覚的になる一助となったことは間違いないだろう。

一方で、本稿で十分検討できなかつた点がいくつかある。先の「川のせせらぎ」の音を聴取した際、同じ立命館の学生の一人は、「快眠やリラックスを目的としたCDの音に水の流れが用いられる理由と関係しているのではないか」<sup>15</sup>と、「なつかしさ」の心理的側面について、問題提起をしていた。こうした学生の指摘のいくつかは、「なつかしい」という感覚、情操の生成や社会的意味を再考する多くの示唆に富んでいた。しかし、残念ながら本稿はそれを分析することが主目的ではなかつたため、十分な検討をすることができなかつた。また、本実践は「なつかしい音」に照準することで、音を通して地域を再発見することも目指していたが、学生たちの収集した「音の風景」には、地域性を表すものは、多くはみられなかつた。それは今後、ワークショップのデザインを変えることで、違ってくるかもしれない。しかし一方で、それを興味深い結果とも受け止めている。学生のコメントの中には、「違う地域に住んでいても、なつかしい音は共感できる部分が多いと思いました」「過去に日常的に聞いていた音や、思い出がある出来事の音を、違う場所や、今改めて聞くことで、懐かしさを感じると思った」といった場所と音との関わりに目をむけたものもみうけられた。こうした、地域と音、あるいは場所と音の関わりについては、今後改めて検討していきたいと考えている。

最後に、この実践の続きにふれておきたい。この後の第2・3段階では、広島経済大学と福岡女学院大学においては、自己のなつかしさ、なつかしい経験について、写真とナレーションで綴る「デジタルストーリー・テリン

グ」<sup>16</sup>映像作品を制作上映した<sup>17</sup>。それは、第1段階における、他者の「なつかしい音」とその経験の共有をとおして自らが感じた「なつかしさ」を語る、リレー型のデジタルストーリーテリングの実践<sup>18</sup>である。詳細は、考案した土屋氏の報告を待ちたいが、それは、「なつかしい音」を個人に閉じられたものとしてではなく、他者との関わりの中から考え、さらに自ら表現していくことを通して、音の記憶や経験について、それぞれが主体的に向きあう過程であったように思われる。

#### 〈注〉

- <sup>1</sup> それぞれ、広島経済大学経済学部メディアビジネス学科、立命館大学映像学部映像学科、福岡女学院大学人文学部メディア・コミュニケーション学科の学生と教員のみなさんである。広島経済大学と立命館大学のみなさんには、共同実践の機会をいただいたことと、その過程で、本稿の執筆につながる多くの示唆をいただいたことについて、心から感謝を申しあげたい。
- <sup>2</sup> 鳥越けい子によると、「サウンドスケープ」という用語が生み出され、提唱されたのは1960年代から70年代に移ろうとする頃だったという（鳥越 1997：8）
- <sup>3</sup> 具体的な事例は『サウンド・エデュケーション』（シェーファー 1992=2009）参照。
- <sup>4</sup> たとえばオング（1982）参照。
- <sup>5</sup> 吉見ほか（1992）など参照。
- <sup>6</sup> 写真を添えたのは、第2段階でデジタルストーリーテリング実践をおこなうためであった。
- <sup>7</sup> 山岸は、音には人々の生活史や人生に深く染み込み、忘れがたいものとなった音があり、「音の原風景」として理解されるようなものがあること。そして「音、人々の「耳の記憶」を通して、私たちは時代の様相を知ることにもできる」と記している（山岸 1999：60-61）。本稿の副題にある「生活史を物語る音」とは、こうした山岸の指摘を参照したものである。
- <sup>8</sup> ここで掲載している写真は、第3段階で交換した「なつかしい音」にまつわる写真である。いずれも録音した学生の提供による。
- <sup>9</sup> 第3段階で交換された音の説明文より。
- <sup>10</sup> 同上。

- <sup>11</sup> 同上。
- <sup>12</sup> 同上。
- <sup>13</sup> コメントシートより。
- <sup>14</sup> 例えば、研究社の『新和英大辞典』で「なつかしさ」をひくと、yearning; longing; fondness; nostalgia とある。また、引用したデービスの『ノスタルジアの社会学』の原題が“*Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*”であることから、参考となるだろう。
- <sup>15</sup> 同上。
- <sup>16</sup> 1990年代にアメリカ・カリフォルニアで誕生した市民のメディア実践活動で、写真と自己語り（ナレーション）などを組みあわせて短い映像にまとめ、上映するワークショップからなる。詳細は小川（2016）を参照。
- <sup>17</sup> 立命館大学北野・北村ゼミでは、「なつかしさ」をテーマとした短編映像を、協同的に制作している。
- <sup>18</sup> リレー型のデジタルストーリーテリング実践については坂田・土屋（2016）参照。

#### 〈謝辞〉

この研究は、JSPS 科研費 JP15K00475の助成をうけて行われたものである。

#### 〈参考・引用文献〉

- Davis, Fred (1979=1990) *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*, Free Press.  
（間場寿一・萩野美穂・細辻恵子訳『ノスタルジアの社会学』世界思想社）
- Halbwachs, Maurice (1950=1989) *La Memoire Collective*, Presses Universitaires de France  
（小関藤一郎訳『集会的記憶』行路社）
- 林田真心子(2014)「音とラジオのメディア・リテラシー実践 ―身近な音でつづるストーリーづくり―」『福岡女学院大学紀要人文学部編第24号』pp. 183-202
- Kern, Stephen (1983=1993) *The Culture of Time and Space*, Harvard University Press（浅野敏夫訳『時間の文化史 時間と空間の文化：1880-1918／上巻』法政大学出版局）
- 小泉恭子（2013）『メモリースケープ 「あの頃」を呼び起こす音楽』みすず書房
- Meker, Hannah (1994=1998) *Listening: Ways of Hearing in a Silent World*, Harper Collins Publishers（鴻巣友季子訳『失聴―豊かな世界の発見』晶文社）
- 水越伸（2002）『新版 デジタル・メディア社会』岩波書店
- （2005）「メディア・リテラシーを学ぼう」東京大学情報学環メルプロジェクト・日本民間放送連盟編『メディアリテラシーの道具箱 ―テレビを見る・つくる・読む―』東京大学出版会、pp. 2-10
- 水越伸編著（2007）『コミュニティなケータイ ―モバイル・メディア社会を編みかえる』

岩波書店

小川明子 (2016) 『デジタル・ストーリーテリング 一声なき想いに物語を』リベルタ出版

Ong, Walter J. (1982=1991) *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, Routledge (桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店)

坂田邦子・土屋祐子 (2016) 「災害を語り伝えるメディア表現：〈他者〉表象から〈自己〉語りへ」2016年社会情報学会 (SSI) 学会大会, 学会発表論文

<http://www.sgu.ac.jp/soc/ssi/papers/31.pdf> (2017年2月13日アクセス)

佐藤健二 (1994) 『風景の生産・風景の解放 メディアのアルケオロジー』講談社

Schafer, R. Murray (1977=1986) *The Tuning of the World*, Knopf (鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕訳『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』平凡社)

—— (1992=2009) *A Sound Education*, Arcana Editions, (鳥越けい子・若尾裕・今田匡彦訳『サウンド・エデュケーション』(新版) 春秋社)

新村出編 (2008) 『広辞苑 第六版』岩波書店

鳥越けい子 (1997) 『サウンドスケープ その思想と実践』鹿島出版会

Truax, Barry (ed.) (1978) *A Handbook for Acoustic Ecology, Vancouver*: A. R. C. Publications

山岸美穂 (1999) 「第1部 感性・想像力とサウンドスケープ」山岸美穂・山岸健『音の風景とは何か サウンドスケープの社会誌』日本放送出版協会, pp. 13-160

吉見俊哉 (2012) 『メディア文化論 改訂版』有斐閣

吉見俊哉・若林幹夫・水越伸 (1992) 『メディアとしての電話』弘文堂

『大辞泉 第二版』(2012) 小学館 (松村明監修, 小学館大辞泉編集部編集)